


 書評

岡田靖雄著

日本精神科医療史

八木剛平

世紀の変わり目で歴史への関心が強まったらしい。精神医学史学会の設立(1997)を皮切りに、精神医学史の著書・訳書の出版が続いている。評者の手許には英・独・仏語からの訳書(1998~99)が一冊ずつ、小俣「精神病院の起源」(1998)とその「近代篇」(2000)、中井「西欧精神医学背景史」(復刻)、八木他「精神病治療の開発思想史」、こころの科学特別企画「精神医学の100年」(以上1999)、浅野「精神医療論争史」(2000)、昼田(編)「日本の近代精神医学史」(2001)、そして本書(2002年7月)がある。

たまたま評者は本書出版の3か月前に「日本精神病治療史」(共著)を出版したが、著者に「私説・松沢病院史—1879~1980」(1981)からの資料転載許可をお願いしたところ、激励の言葉を添えて快諾され、また本書の「あとがき」では拙書に言及してくださった。書評の依頼はそんなご縁からであろうと推測している。

さて本書は4篇から成り、その時代区分と内容は以下のとおりである。

第I篇：江戸時代前(47頁)。第1章：奈良時代、第2章：平安時代、第3章：鎌倉・室町時代。

第II篇：江戸時代(59頁)。第1章：医説を中心に、第2章：治療・処遇など。

第III篇：戦前(81頁)。第1章：文明開化、第2章：精神病患者監護法の前後、第3章：精神科病院と精神病学との発達、第4章：呉秀三と精神病院法、第5章：敗戦まで。

第IV篇：戦後(43頁)。第1章：精神衛生法の制定とその後、第2章：現在史。

付章の「精神科医療史研究の意義と課題」に続いて、西暦507年(禮體即位)から1970年(三島由紀夫自刃)までの「日本精神科医療史年表」「事項索引」「人名索引」が付されている。

40年以上も精神科医療史にとりくみ、20年も精神科医療史研究会の世話人である著者によれば、「歴史研究とはなによりも現在の精神科医療の構造を立体的にてらしだす光」(付章)であり、本書のねらいはまさにここにあった。精神医療改革運動の基礎論としても歴史研究は不可欠なのである。著者は「日本の近現代精神科医療史とは、徹底した病者虐待であり、その底流は現在もかわっていない」(あとがき)と言う。著者が再発見して精神衛生法改悪反対運動(1964)の旗印とした日本の精神病患者の「二重の不幸」(呉秀三)は、今では日本の精神医療を批判する際の常套句になっている。著者にとって呉の言葉は日本の精神科医療の立体構造を照らし出した最初の光であった。

なお評者らの著書については「八木さんらの本が花も実もつけているとすれば、わたしのは幹をかいただけ」とある。表面的には謙遜と拙著への評価であるが、歴史とは幹を書くことだという強い自負が感じとれる。敢えて花や実をつけた拙著が、「日本の精神科医療史を研究していくうえで」(付章)歴史学の基本に沿っているかどうかを自問させられた。

著者の今後の仕事は「目でみる精神科医療史」をまとめることだという。いまから楽しみである。

(翠星ヒーリングセンター)

● B5 288頁 2002 本体6,800円 医学書院刊